

火星



七曜抄

山尾玉藻

蒲の穂に蝶の触れたる梅雨入かな

牛の貌あぢさゐる叢を出で来たる

藻の花の向う袴の父佇てる

百幹の竹騒にゐし墓

子子に撞きそこなひし鐘の音

魚籠覗きけふの暑さの始まりぬ

ががんぼに次々ありし寺柱

遠見ゆる昼の投網を机より

スカートが金魚のやうや片かげり

宵宮の雫してゐるさるをがせ

火星作品

山尾玉藻選

皿の上に海老のしつぽの梅雨入りかな
八幡 大山文子

夏蜜柑むく母の声高うなる

麦秋や体内時計狂ひたる

薔薇の上に通天閣のありにけり

亀の子に四天王寺の柱影

交番に百合の花束束のまま
神戸 深澤 鱻

桐の花うからやからの身のたつき

夏蝶の舌ををさめし男山

百幹の竹の皮脱ぐ真夜なりし

はんざきの月見るころを寝まりけり

重箱も蓬の餅もなくもりたり
大和郡山 城 孝子

麦秋の波しづかなり夫婦岩

青あらし竜神さんに日が当たり

緑雨かな背中下りくる聴診器
 夫の足小さくなりたる若葉冷
 学校のプール満ちある祭笛
 西宮 米澤光子
 花著莪に脚踏入れし神馬かな
 膝の上にはすかんぼ置いてくれにけり
 橋掛かりに楠の花降る貴船かな
 花栗やごとりごとりとシヨベルカ
 明易の乾いてゐたる高御座
 八幡 飯塚糸子
 女らに竹皮を脱ぐ勇の碑
 鱧釣るや救命胴衣着せられて
 聖堂の閉ぢられてゐし梅雨茸
 老鶯に囀されてゐるヘルメット
 正面を採してをりぬ花菖蒲
 兵庫 大東由美子
 赤ん坊の尿は上向き新樹風
 血管のありし八十八夜寒
 初夏の後立山より手紙
 花道を木偶の歩みぬ五月闇

選のあとに

山尾 玉藻

皿の上の海老のしつぽの梅雨入りかな 大山 文字

〈天ぶらの海老の尾赤き冬の空 波多野爽波〉という同工の句が先にある。掲句の季語は「梅雨入り」、梅雨の季節は明るいものはより明るく、暗いものはより暗く見えるもの、文子さんの「海老のしつぽ」は生きて来るのである。余談だが「梅雨入り」と言うのは降る雨を思わせるより、「入り日」と言う日を意識して創るのが普通のようだ。同時作〈薔薇の上に通天閣のありにけり〉は天王寺公園辺りからの景、ややレトロ的になった「通天閣」には「薔薇」がよく似合う。

夏蝶の舌ををさめし男山 深澤 鱧

「舌ををさめし」は巧いがこの辺では驚かされぬ。しかし絶対的固有名詞とも言える「男山」が動かない。「夏蝶」の夏が響かせ過ぎともとられかねないが、この句では必然。

夫の足小さくなりたる若葉冷 城 孝子

職を退き暫らく経つ夫の足が小さくなったと言う、やや淋

しげな感慨である。しかし実際に足が小さくなったと見る方が鑑賞としては上かも知れない。「若葉冷」がそう思わせる。

花栗やごとりごとりとシヨベルカー 米澤 光子

この作者には以前にも「シヨベルカー」の句があったと記憶している。山の造成地などの景であろう、「ごとりごとり」という最も俗っぽい副詞が「花栗」に似合っている。

明易の乾いてゐたる高御座 飯塚 糸子

京都御所の景であろうか、天皇が式典に使われる椅子「高御座」はそう頻繁に使われるものではない。「乾いてゐたる」は当たり前のようだが、「高御座」の在り様として納得する。

赤ん坊の尿は上向き新樹風 大東由美子

この号が出る頃、由美子さんの句集『靴音』が出版される予定である。生活臭の強い主観は出来るだけ消し、健康で明るい句集である。これまでとは一味違った句集に期待して頂きたい。掲句もきわめて健やかで明るい景である。

青葉闇乳母車ごと抱き上げし 杉浦 典子

作者が子育てをされていた頃、これに近いことをされていたに違いない。その回想とも思われるが、自らの年齢を感じ

ると共に、この行為を眩しく見ておられたのではなからうか。

見えてきて小さくなりし滝の音 戸栗 末廣

五感の中で最も目立つ働きをするのが視覚、その次が聴覚である。この「滝」の存在が聴覚だけにあったものが、ふいに視覚に移ったのである。やや理を感じさせるような表現であるが、滝へ行く道の様子まで自ずと見えてくる佳句である。

十葉の香の流れきし疲れかな 高尾 豊子

香で疲れを感じさせるのはやはり「十葉」ほどの強さが必要であろう。ただ、香で疲れを感じさせるのを一句としたところは豊子さんの手柄と言わねばなるまい。

補聴器つけ茅花流しの中にをり 木野本加寿江

良い句であるが鑑賞し難い句でもある。この句の中の「補聴器」は「補聴器」としての働きは全く意味が無い。しかし一句の中では十分に働いている。

履き馴れし靴の卯の花腐しかな 金澤 明子
同じ靴ばかり履きをりみみず鳴く 長屋 璃子

こう並べてみて一見同じような意味に解釈をされそうだが、お二人を知る私には全く違う思いが感じられる。近年障害を

持たれるようになった明子さんの靴は、その為の特注の靴である。長雨は身にこたえられるであろう。この「履き馴れし」には、この靴を履く他は無いという思いなのであろう。それに対し璃子さんの句は、お酒落よりも履き易い靴を履き始めた自分の齡への自嘲である。

五月来る羊歯の拳の握りやう 吉田 康子

「羊歯の拳」は蕨や薇を思えば良い。同じ拳でも数日前まで摘んでいたものとは明かに違ってきたのである。色は鮮明になり拳も半開きのように見てとつたのかも知れない。しかしこの句、一景を写し取ったというよりも「五月来る」と意識した作者のこころの写生といった方が正しいかも知れぬ。

貝の背に日の当りある卯波かな 堀義 志郎

作者が療養中の身と聞けば大いに納得出来る。「貝の背に日の当りある」の貝の背は、神経質とも思われるほどナイーブで繊細である。「卯波」この位置関係も良い。自分の心身に添った作品が出来る作家は信用出来る。

げんげ田に二足脱ぎあるズック靴 波田美智子

回想であろうか、懐かしくも美しい景である。

玉藻俳句鑑賞

川風のかよひ始めの蛇の衣 玉藻

〔火星〕平成十五年六月号より

川沿いを行くと、何かひらひらと動くものが見える。草陰のそれは、銀色の網のような蛇の衣。風に吹かれなければ見落としていたかも知れない。「川風に吹かれて——」などと因果的に述べず「——のかよひ始めの——」がとても良い。

「風に光る蛇の皮を効果的に修辞している。」

（春月）



恒星圈

元田千重

花大根海女ひらひらと通り過ぐ
どくだみや変体仮名のうろ覚え
進水終へタンカー初夏の風にあり
病棟の常連ばかりさつき咲く
葬儀屋のたちまち去にし杜鵑花かな

廣畑忠明

柳生千枝子

靴修理の間口半間さみだるる
寺見えて生家見えきし栗の花
鹿の斑に新樹の日の斑重なりぬ
万緑やわが来し方の罪いくつ
新興の家に囲まる花菖蒲

葉桜の影を拾ひて下校の子
葉桜のおしやべりを風吹き過ぐる
才能の兆しや児に見て初浴衣
芸能の家に育ちて祭鱧
鱧料る厨を風が吹きぬけて

深澤鱧

山本耀子

新緑やむかひ合せの焙り餅
閉館の西灘シネマ栗の花
地車の掠めし筋の祭屑
流鏝馬や馬の臭ひの木下闇
水風呂の顔難しき心太

佛みな金ぴかに坐す新樹光
筒鳥や版木積みある堂長し
時鳥谿のさみどり切り裂きし
一畳ほどの沓脱ぎ石の梅雨入かな
みどり立つ松篁画室閉ざされて

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

麦星やサツカー場の空つぽで
青嵐胸の高さに下馬の石
砲台の向うイムジン蔦茂る
ピピンバに舌焼きにけり夏の風邪

城尾たか子

宝殿の駅に降り立つ夏帽子
夏めくや影の大きく座る岩
蜻蛉生る浮き石揺れてゐるやうな
黒南風や白く眩しき屏風岩

土屋酔月

大観の富士を思はず五月富士
葛ざくらのせてくもりし銀の皿
新樹光人現はれて人消えて
欠伸して耳遠くなる夏の海

堀 義志郎

足元に冷えの来てゐる栃の花
馬鈴薯の花早咲きと遅咲きと
浦島草毛虫太りてをりにけり
噴水に風の強弱ありにけり

今里満子

白犀のラツパの耳や南風吹く
犀の背の泥乾きゐる青嵐
河骨の昼を点して法の池
昼近き影の垂れゐる釣鐘草

高松由利子

青鷺の羽音に御陵暮れやすし
卯波越え江戸へ醸せし下り酒
初夏の波寄する辺の文弥節
うねりくる渚の深みや黒揚羽

山田美恵子

薔薇園のタイルを踏める靴の音
麦秋の風筋にある母の腰
祭笛街は煙のやうな灯に
水無月の磯へ伸ぶ径仄明し